

理性へ 彼女は静かに訴える

写真は朝日新聞 4 月 14 日朝刊、小説家で詩人の多和田葉子さん「ベルリン通信」。コロナ禍のドイツ、メルケル首相の発言に関心があり、抜粋して紹介する。

思えば日本がまだ夏にオリンピックを実施する気でいた頃すでにドイツでは「感染ピークは数週間後、ひょっとしたら 6 月以降に来る」と判断し、感染の広まる速度を遅らせることに焦点を当てた対策が取られ始めた。イタリアでは急増した重症患者を医療施設が受け入れきれず、死者数が毎日増えていた。同じ失敗を繰り返さないためには社会生活を規制するしかない。ドイツ人の甘えのない現実主義に感心してしまった。もう一つ感心したのは、「高齢者や病人などの弱者を守る」という目標が常に強調されていたことだった。「弱者のために」外出をひかえるように、という呼びかけに若い人たちも徐々に応じ始めた。ドイツ人は個人の行動の自由を規制されることには敏感だが、メディアを通して短期間に集中的に議論が交わされ、情報が行き渡ったおかげか、みんなが納得するスピードと規制が強まるスピードがほぼ一致していた。上からの命令に有無を言わず従わせた方が話は早いのもかもしれないが、コロナ危機が去った後に民主主義感覚が麻痺しているのでは困る。独裁政治は時にウイルス以上に多くの死者を出す。

(お店などの) 不安に答えるように、国の予算が赤字になるのは承知の上で補助金を出す、とメルケル首相が発表した。零細企業は雇用者に払う給料の一部と家賃を肩代わりしてもらえる。フリーの俳優、演奏家、朗読会の謝礼を主な収入源にしている作家などは、蓄えがなくて生活が苦しくなった場合は申請すればすぐに 9 千ユーロの補助金がもらえる、と書かれた手紙が組合から来た。

興味深いのは、ポピュリストたちが大幅に支持者を失ったことだ。彼らは以前、移民こそが国を蝕むウイルスであるかのような演説を行ってきたが、本物のウイルスが発生した今、ウイルスの危険性を否定するだけで現実的対応のできない極右党は支持者を減らしている。その一方で、ウイルス研究所や科学者たちの意見を参考にしながら次々と具体的な対策を打ち出していくメルケル首相が広い層の信頼を取り戻した。移民受け入れに非常に積極的だった彼女が、それについていけない人々の支持を失った時期があったが、今度の危機では住宅環境に恵まれない難民など弱者を守ろうという雰囲気がベルリン全体に広がっている。

テレビを通して視聴者に語りかけるメルケル首相には、国民を駆り立てるカリスマ性のようなものはほとんど感じられない。世界の政治家にナルシストが増え続ける中、貴重な存在だと思う。新たに生じた重い課題を背負い、深い疲れを感じさせる顔で、残力をふりしぼり、理性の最大公約数を静かに語りかけていた。



(2020 年 4 月 16 日)